

# 資料紹介

NHK「アフリカ」プロジェクト著  
アフリカ 21世紀——内戦・越境・  
隔離の果てに 東京 NHK 出版  
2002年 245p.



本書は、2002年1月から2月にかけて放送されたNHKスペシャル『アフリカ 21世紀』をもとに書かれたものである。ソマリア、セネガル、マリ、南アフリカ、ジンバブエの5カ国が取り上げられている。

構成は、プロローグに続いて3章からなっており、第1章では長年内戦に苦しむソマリアをアメリカとの関係を基軸に取材し、第2章ではアフリカにおけるイスラムの状況を、イスラム教徒が多数を占めるセネガルとマリの人々の生活を追うことで紹介している。最後の第3章では、黒人と白人入植者との対立の問題を、アパルトヘイトの傷痕に今なお苦しむ南アフリカと、白人入植者の農地返還問題で混乱の中にあるジンバブエを取材することで明らかにしている。

各章ともに良質なルポルタージュである。2001年9月11日の同時多発テロ事件以降の世界状況も視野に入れたアプローチとなっており、特にアルカイダとの関係も取り沙汰されるソマリアについては、武装勢力のリーダーへの取材を通して通常は報道されないさまざまな事実を教えてくれる。他の国についても、アフリカの人々と、生活の中に根づいているイスラムそして植民地支配の遺制やグローバル化との関係を、彼らの生活に入り込む形でリアルに切り取って伝えている。

本書の冒頭で語られているように、アメリカ中心のグローバル化への批判と、それに翻弄されながら生活しているアフリカの人々の姿を日本人に届けようという熱い意志が、この一連の取材の原動力なのであろう。本書を読み進むほどに、その主張は十分伝わってくる。ただ、この明確すぎるメッセージ性は同時に、その正当性を証明するためにこの5カ国を選んだような、恣意的な印象を若干残す。そういう部分を除けば、専門書や紀行文とは異なる形で各国の人々の姿を伝える魅力的な本である。

(児玉由佳)

P・カーティン著 (田村愛理・中堂  
幸政・山影進訳) 異文化間交易の世  
界史 東京 NTT 出版 2002年 393p.



西アフリカの歴史を専門とする著者が、世界各地に見られる「交易ディアスポラ」に注目して描いた世界比較史が本書である。宗教・言語・エスニシティなどのさまざまな連帯の絆を基礎としながら、各地に滞在して交易のためのネットワークを広げる交易ディアスポラは、早くからアフリカの交易発展に貢献してきた。ニジェール川周辺の諸王国の発展に重要な役割を果たしたムスリム商人やジュラ商人などは、その代表例である。著者のカーティンはもともとセネガンビア地方の歴史が専門であるが、本書では広く世界各地の交易ディアスポラをとりあげてその特徴を明らかにしている。

本書は全体が11章構成で、うち2章が著者の専門のアフリカ地域にあてられている。他の各章の内容は、古代交易、アジア海上交易、ヨーロッパ-東アジア間交易、北アメリカ毛皮交易など多岐にわたり、主に19世紀以前の時期が対象となっている。

「本書は世界交易史ではない」(p.25)と著者が明言しているとおおり、通常の意味での「世界史」を描くのは本書の目的ではないようだ。むしろ世界各地域の歴史の中で見られた異文化間交易と、そこで重要な役割を果たした交易ディアスポラという現象を抽出し、それらの類似と差異を見つけだすことに力点が置かれている。したがって各章の内容は、世界史のメジャーな動きに関心を持つ人よりも、経済人類学や地域史に関心のある人のほうが興味を持つようなものになっている。

本書の結論は逆説的である。交易ディアスポラは歴史上、異文化間の商業活動を発達させるために重要な仲介者として広がった。しかし商業活動がさらに発達して人とモノの交流が活発になると、異文化間の差異は縮小して仲介者としての交易ディアスポラの重要性は低下する。つまり交易ディアスポラの発達には、自らの消滅を前提としているわけである。訳者の一人による本書冒頭の「解題」は、そのあたりの逆説をうまく解説しており、読者のよい道案内になっている。

(高根 務)

加納弘勝・小倉充夫編 変貌する「第三世界」と国際社会（国際社会7）東京 東京大学出版会 2002年 251p.



宮島喬，小倉充夫，加納弘勝，梶田孝道の4氏編によるシリーズ「国際社会」（全7巻）の一冊。1～6巻では日本，欧米など非アフリカ地域が主に取り扱われるが，本書には，アフリカを専門とする3本の論文が収められている。

一つが，小倉「移民政策と国際社会」である。ここでは分析の射程は意図的にアフリカ人以外の人々——具体的には，インド人，中国人，ユダヤ人——におかれ，彼らに対する南アフリカでの政策的規制が分析される。これにより，既存研究の中でアフリカ人移動に集中してきた，南アフリカへの国際移動に関する分析の限界が明快に示される。

三島禎子は「国際移動と地域開発」と題し，「移動の主体性」「独立移民」というキーワードのもとでソニケの人々が持つ移動論理への接近を試みている。三島は，送り出し社会のプッシュ要因についてこれまで資本主義世界経済との関わりにおいて分析される傾向が強かったと指摘し，経済要因に帰結しがちだった要因分析の典型から脱却する一つの方策を示すことに成功している。

国際移動の一つのあり方として，武力紛争による人の移動という側面を見逃すことは出来ない。これに取り組んだのが武内進一「内戦の越境，レイシズムの拡散」である。中部アフリカの武力紛争分析において国境にとらわれない枠組みを採用することの重要性は，マンダニラによってつとに指摘されるところである。本論において武内は，ツチという社会集団へのレイシズム言説に着目し，その生成変化と拡散の様子を追っていく。分析の地理的領域はルワンダ，ブルンジ，コンゴ民主共和国東部へと自在に広がることとなり，国境線の意味が相対化されていく。

各論文とも，先端的問題意識のもとで詳細な事実関係を組み上げており，アフリカ専門の読者にとっても必読の文献になっている。なお，シリーズ5巻『グローバル化と社会変動』には小倉，遠藤貢両氏によるアフリカを取り上げた論考がある。こちらもぜひ参照されたい。

(津田みわ)

フランシス・クリスティ，ジョセフ・ハンロン著（モザンビーク支援ネットワーク有志抄訳）モザンビークと2000年の大洪水 2002年 147p.



2000年にモザンビークは大洪水に襲われた。干ばつと洪水の繰り返しに慣れているこの国の人々にとっても，150年に一度とも言われる今回の洪水の規模は，想像をはるかに超えるものであった。洪水により700人が死亡し，紛争終結後ようやく復興が軌道に乗りかけてきていたモザンビークの社会基盤は一気に破壊されてしまった。

本書は，長年モザンビークに係わってきた2人の著者による，この大洪水に関するドキュメントである。洪水による被害の甚大さ，洪水によって家族と引き裂かれた被災者の悲しみを如実に伝えながらも，本書全体としては，モザンビーク人と国外からの援助関係者が協力して実施した救援活動によって4万5000人もの人々が救出されたという，国際連帯の意義を強調するものとなっている。救援活動においては人命に係わる重大な失敗もあったが，成功からはその秘訣を，失敗からは教訓を引き出す前向きな姿勢が印象的である。国連ではなくモザンビーク政府がイニシアチブをとったことで救援活動がスムーズにいった，との分析はとりわけ傾聴に値する。

原著は2001年に出版され，大洪水を機に設立された日本の市民団体「モザンビーク支援ネットワーク」の有志（評者もその一人）が抄訳を作成した。（財）国際開発センター21世紀開発基金の助成により制作された抄訳の冊子は，希望者に送料のみの負担で在庫のある限り配布されている。また抄訳の全文がインターネット上で公開されている。冊子，オンラインのテキストともに，入手方法は「モザンビーク支援ネットワーク」ウェブサイト内の[http://www1.jca.apc.org/mozambique-net/ja/books/version\\_index.html](http://www1.jca.apc.org/mozambique-net/ja/books/version_index.html)を参照されたい。

(牧野久美子)

竹沢尚一郎著 表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学 京都 世界思想社 2001年 339p.



ずっしりとした知的重量感を与えてくれる読み応えはもちろんのこと、読み進むこと自体が楽しいという読書本来の悦びに誘われる。マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』の序文を「デュルケム以外を連想させない一文である」と形容するあたりの文体センスには、著者によって民族学系譜の手解きを受けていることを忘れ、昭和期の香しい評論文学に接しているような愉悦である。

本書は、プロカ人類学、デュルケム社会学、モース民族学へと屈曲しつつ流れていく異文化理解の思想を、前史としてのドラフォス、後史としてのレヴィ＝ストロースによって挟み込むかたちで、異学徒にも浸透する文体で迎らせてくれる。そのパースペクティブには、フランス革命、産業革命と帝国主義、そして二つの世界大戦という大状況がしっかりと組み込まれていて、学問と時代要請の決して一様ではない相互干渉が論述をダイナミックなものにしている。しかもその論じぶりはダーウィニズムやシュルレアリズムを包み込み、ランボー、フロイト、ゴーガン、ピカソといった知の革命家達を縦横に取り込んでいくのであるから、読み手が興奮しないわけにはいかないのである。本書は「フランス」なるものの近代文化史として、十分に総合的である。

ヨーロッパがアフリカに出逢うという歴史的不幸。イスラーム文明の覇権が後進ヨーロッパによって篡奪されていくという暴力。民族学の先行種はそこに生まれ、ときに嫡子、ときに遺児として、苦しみながら現在に至った。時代との血を吐くような緊張関係に苛まれて学として育っていく過程がユダヤ系の人々に多くを負っていることは、たいへん示唆的である。

人類を見る学問であろうとし、人間と社会の全体性を記述しようとしてきた民族学（あるいは社会学）の、なかば強要された“野心”は、この学問がエスタブリッシュメントになりかかると一旦崩壊する必然をもたらしているように思える。それだけに時代を最もよく映し出す。

(平野克己)

藤井真理著 フランス・インド会社と黒人奴隷貿易 福岡 九州大学出版会 2001年 172p.



前号に続き、奴隷貿易関連の研究書を取り上げる（前号では、小川了著『奴隷商人ソニエ』山川出版社を紹介した）。もっとも、本書の方が小川氏の著作より出版時期が早い。日本人研究者の手による初の本格的な奴隷貿易研究書といってよい。一次資料を駆使したオリジナルな発見が随所にみられ、論理展開は実に手堅い。さすがに博士論文だと感嘆した（本書は著者が九州大学に提出した博士論文に基づいている）。

本書は、18世紀にフランスの奴隷貿易が顕著に伸張した事実に注目し、それを可能にした条件の解明を試みる。当時フランスの奴隷貿易を主として担ったフランス・インド会社に焦点を当て、その活動を規定した制度や経営の実態を明らかにするとともに、奴隷貿易の成長を可能にした「客体的条件」であるセネガル地域の奴隷市場の構造と変容についても詳細に論じている。奴隷貿易の「担い手」を、ヨーロッパ人のみならずアフリカ人も視野に入れて描くことで、貿易拡大メカニズムの全体像が見事に析出される。研究のオリジナリティという点でいえば、フランス・インド会社の経営史分析が本書の白眉なのだろうが、奴隷貿易を巡る具体的史実が豊穡に盛り込まれた本書は、全てのアフリカニストにとって有益な情報を多々含んでいる。

あえて注文をつけるなら、本書の分析内容をメタなレベルから位置づける記述をもう少し厚くしてほしかった。18世紀のフランスによる奴隷貿易は、当時の奴隷貿易全体のなかで、あるいはフランスの（奴隷）貿易の歴史的推移のなかで、いかなる位置にあり、いかなる意味を持っていたのか。こうした枠組みの設定に関する記述は、本書では序論で軽く触れられるだけだが、もう少し丁寧論じることで、本書の意義とオリジナリティがより明確に読者に伝わったのではないかと。ともあれ、本書の出版が日本の奴隷貿易研究において画期をなすことは間違いない。それを素直に喜ぶたい。

(武内進一)